



Title	中村本「夜寝覚物語」の改作態度：人物の改変についての一考察
Author(s)	種本, 節子
Citation	語文. 1958, 21, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中村本「夜寢覺物語」の改作態度

——人物の改変についての一考察——

種 本 節 子

中村本「夜寢覺物語」は、平安末期の物語である註1「夜半の寐覺」(以後原作と略称する)の改作本であるが、その原作に対する改作の態度には、種々興味ある問題が見出されるようである。これ迄にもこの中村本の改作態度については、色々御見解が述べられて来たが、この小考も、それら種々の改作点のうち、特に人物上に於ける男女の性の変更と血縁関係の改変に関して考察を試みようとするものである。論証の便宜上次の順序で考察を進めたいと思う。

(一)大君遺子の改変について

(二)源氏太政大臣子女の系図の変更について

一 大君遺子の改変について

中村本巻三(下六一頁)以後に登場する大君の遺子「かたみの若君」が原作の小姫君に相当する人物であることは、既に論証されたところであり、そこに行われている中村本の改作点についても二三の御考察があるが、今改めてそれらの御見解を参照しつつ、この問題を考えてみようと思う。

中村本は次の二点について改作を行っている。

(1)原作の女兒を男児にしていること。
(2)原作に於ては、母大君の死によって五十日の祝の時以後引続き女主人公の許で養育されているのに、中村本では五十日の祝に一時女主人公の許へ渡されるだけで、又主人公の許へ帰されることにしていること。

右の(1)について、長谷川氏は「中村本が黒川系本では、男子である主人公女主人公の第三子を、女子に改変している例があり、中村本が黒川系本と趣きを変えようとする傾向のあらわれとも云えよう」。(前掲論文五頁)と云われたが、これに対して前田氏は、この改作点にもっと積極的な理由を見出そうとして居られるようである。つまり、中村本に於て「かたみの若君」をめぐる叙述に強調されているのは、女主人公への執拗なまでのあやくなる愛情であり、それに応える女主人公の姿である。」として、「その愛情の強さを出し度くて大人しやかな姫君をその範疇から逸脱させずにむしろ若君に変えたのではなからうか。(中略)(主人公女主人公の)大君に対する「罪」を軽減しようとして、第一に血縁を変え、第二に女一宮事件を省略したとみることも出来る。そしてその第三として、大君の遺子が女主人公の子となり切っている事、親子の愛が互

に緊密なることを強調したと考へてはいけなからうか。」と述べて居られる。(前掲論文四一頁)

(2)の改作点については、長谷川氏が、「もともと女子であったものを男子に改変したために生じたもの男子であれば、女子の場合程に親身な親代りはなくともよいし、大きくなれば、他の姫君たちと一緒に育てる事も出来ずめんどうであろうと思われ。」(前掲論文五頁及び松尾聡氏著「平安時代物語の研究」所収「夜半の寐覚大略」)との御見解を表明して居られるだけである。

さてそれではこの二点に改作を施した中村本作者の改作の意図は果してどこにあったのであらうか。こゝで先ず、原作に於ける小姫君の位置を考へてみる必要があるが、この点の概観については既に触れて居られる点もあるので、出来るだけ重複をさけて述べてみようと思ふ。

原作の現存巻三から巻五迄に於て、小姫君の登場する場面は全て次の二つの場合に大別出来るようである。①主人公が女主人公の許へ出入り出来る公然たる理由として使われる場合、②女主人公の身辺を離れずよくなつき大姫君雅子君とも眞の兄弟のようになれ陸ぶという女主人公の身辺描写或はなごやかな團欒の場面の一要素として使われる場合である。これより前、中間欠巻部分に於て如何なる役割を演じていたかを、具体的に示す資料は、無名草子、風葉和歌集、拾遺百番歌合(以後これらを総称して原作系諸資料と呼ぶ)にも見当たらないが、しかしこれらの諸資料と中村本との照合によつて中間欠巻部分の内容を検討してみると、②女主人公の夫老閨白の死後は、外的条件の上から云つても現存部分と大差はなかつたらうと考へられ、又その生前に於ても、主人公と女主人公との逢瀬を作る

理由として利用されるには、現存部分よりも幾分難かしい状態にあったであらうが、女主人公の身辺を離れられない存在として、女主人公の身辺描写に精彩を与へ―それは同時に女主人公の母性としての欠ける所なき美しさを表現するのに役立っていたと思われ、―又時には姉大君を偲ぶよすがとしても描かれていたその程度であつたらうと推測される。要するに、この部分に於ける小姫君の役割は概略に於て前記①の範疇に入れられるものと考へてよいであらう。

更に末尾欠巻部分に於ける小姫君の役割は、これ又原作系諸資料には全くその名すら表れていないが、欠巻部分の構想を検討してみると恐らく②女主人公の辛い宿命の実現の過程に於いて、多年の出家の望みをいつまでも妨げる絆の一員として、つまり他の主人公との間の末子達と共に、女主人公の後見を必要とする人物として僅かな場を与えられていたに過ぎないと考へられるのである。この様に見えるべく、原作に於て小姫君の存在が最も必要とされたのは②の場合である事が認められるであらう。つまり、主人公は女一宮やその母大皇宮に対して自分が女主人公の許へ渡らねばならない理由として事毎に小姫君の事を出し(校註本二一五・二三九・三〇九頁―以下原作の頁数は、全て校註本のそれである。―)その場合、女主人公の父入道からかつて女主人公の世話を依頼されたこと、及び自分の叔父(註4)である故閨白から、その北方女主人公や遺女達の後見を依頼された事も一応の理由となるのであるが、(二三九頁)しかしそれらは、そう頻繁に女主人公の許へ渡らねばならない程決定的な理由とはならない。或はそれとしては弱いのである。―又西山の父入道の許へ逃れた女主人公の後を追つて来た主人公は、その理由を入道に説明するのにもやはり小姫君を利用するのである。(二五七頁)

このように、女一宮方に対しては勿論の事、主人公達の実情を知らない世間に対しては、主人公達二人の出会いの必要性を説明する唯一の公然たる理由となるのが小姫君の存在であった。結ばれるべくして結ばれず全く思い断とうとして離れ切る事を許されない主人公達の辛い縁の実現の過程に於いて、二人を常に精神的に結びつけるよすがとなるものは、二人が別れに身に添えて育て、ゝる大姫君と雅子君の存在であった。しかしこの二人の子供は共に世間に対しては主人公達の間の子供という事は秘めてあって、表向きには二人の出会いを認めさせる理由とはならない。その中であって、主人公達の逢瀬を作る公然たる理由となるものは、主人公の先妻大君の遺児であり、今はその妹女主人公に養育されている小姫君の存在だけであった。こゝにこそ原作者が小姫君を登場させ、更にそれを母なき後女主人公の許で養育されることとした意図があったと考えられるのである。(原作に於ても中村本の如く大君が遺児の世話を女主人公に依頼して他界するという事実は当然あったものと推定される。)

一方中村本に立戻つてみると、最初からの物語の進展上、大君が子供を残して死ぬ事、又その子供の世話を女主人公に遺言する点迄は原作のまゝを踏襲して大君遺児の存在を残したのであるが、こゝで中村本はその本来の改作態度、つまり「夢はむなしからず」という主題の実現の爲と、短篇化の目的とから、巧妙にも女一宮の主人公への御降嫁を取り去って齋院になられることとした。そうなる女一宮方に対する主人公の夜離れや退出の理由を提供するという、大君遺児の本来の存在理由がなくなった訳である。と同時に、その目的の爲にこそ、あえて女主人公の許で養育されることとした原作の構想は全く無意味なものとなったのである。(原作に於て遺児が

成程頼りなげな女子であったとはいへ、必ずしも女主人公の手に託されねばならぬ必然性はなく、大姫君と同格に主人公の母尼上の許に乳母の懐で成育する事も出来た筈であるし、又大皇宮が自らいっているように(二三六頁)それが主人公を女主人公から遠ざけようとする為の、憤怒と共に出た言葉であったとしても後妻である女一宮が引取って養育する事も出来た筈である。原作に於て遺児を大君の遺言によって女主人公に養育させた意図は余りに明瞭であろう。)従つて中村本が尚原作のまゝを踏襲して、大君遺児を五十日の祝の後にもずつと女主人公の許に置くことすれば、それは全く無意味な存在であるにもかゝらず、前記⑥に述べた如く、女主人公の身辺描写に際しては無視出来ないものとして、いたずらにその叙述を煩わしくするだけのものと考えられたであろう。こゝに原作の線に沿つて一旦五十日の祝に女主人公の許へ渡された遺児を、又主人公の許へ帰した根拠があったと考えられるのである。全般に亘つて叙述の簡略化を意図する中村本であつてみれば、又女一宮の御降嫁を取消して後、省略或は改変の度を除々に進めて、円満な結末を急いでいる改作者であつてみれば、右の根拠は十分肯けるものと考えられるのである。因みに、中村本に於て主人公に女一宮なく、女主人公に老閑白なき後は、原作に於て精神的にのみしか主人公達を結び付ける働きをしなかつた大姫君と若君とが、現実的にも十分に利用されてめでたい結末への推進力の役目を果しているようである。

この点の改作理由として、前述の如く長谷川氏は、「男児に改変した爲に生じたもの」と述べて居られる。しかし同氏が、一緒に育てたとする事が出来なかつたと考えられた老閑白の三人の姫君達は先ず年令的にいってこの「かたみの若君」とはかなり開きがあるよ

うである。「かたみの若君」の誕生は老閨白の姫君の十六、十四、十一才の年と算定される。更にそれよりも、女主人公の許には若君（原作のまさこ）が居るのであって、むしろ一緒に育てるには好都合であったとさえ考えられるのである。（若君はこの年六才と算定される。）この考え方に従えば、原作通り女児としていた場合の方が却って男児である若君と一緒に育てたとする事が出来なかつた筈となり、（若君と大君遺児とは表向きは従兄弟の間柄とされている）原作の構想自身を否定しなければならぬ事になる。又原作通り女児とした場合でも、前述の根拠から、主人公の許で、大姫君と共に尼上に養育されたとする事も、しようと思えば出来た筈である。要するにこの改変には遺児の性別は直接の關係を持ってはいなかつたと考えざるべきではないだろうか。

それでは何故、中村本作者は大君遺児を男児としたのであろうか。前述の長谷川氏の如く、単に趣きを変えようとする傾向と見る事は成程内容的に全く根拠の見出せない場合には可能であろうが、この場合は些か改作者に内的意図があつたようである。即ち、中村本の結末は、めでたく主人公と女主人公とが結ばれて、大姫君は后となり、故閨白長女の尚侍の皇子は東宮に立ち、この上なき一門の繁栄と円満な幸福の絶頂とを描いて、この物語を閉じているのであるが例の「かたみの若君」は女主人公が内裏より主人公の許へ引取られて以来女主人公や大姫君若君と眞の親子兄弟のようになれ睦び、この巻末に於ては、何事も思うまゝなる主人公が、「かたみのわかこゝのつになり給ふを、げんぶくせさせて、侍従になしたてまつり給ぬ」（下二七頁）と記している。そして女主人公はこの若君の成人につけても、姉大君が遺児の養育をくれぐれも頼んで他界した事

などを思い出して涙を流しているのである。これは明らかに中村本がその結末に於て大君關係の事件について最後の締括りをつけたものだと考えられる。中村本は他の事項についても、同様にそれぞれによく結末を付けて、中村本としてのまとまりを見せているのである。つまり、大君かたみの若君問題については、主人公達はその遺児を立派に養育し上げ、その若君は今や侍従となつて前途洋々として全くめでたい限りである、という訳である。要するに中村本作者は、より完全な主人公達の幸福を描かんが為に、この若君についても、立派に成人して前途に何の不安もない形にしてこの物語を終り度かつたのではないであらうか。この場合原作の如く大君の遺児を女児としていたならば、男児の如く簡単に元服という形によって女主人公の手を離れる事は不可能であり、原作に於てそうであるように、いつまでも女主人公の後見を必要とする頼りなげな存在として残されたであらう。大君遺児を男児とした意図はこの結末に理由があつたと考えられるのである。

前述の如く前田氏は、この点について、女主人公に対する愛情の強さを出す為として居られるが、「かたみの若君」が女主人公に非常になれ睦ぶ描写にたとえ強調があつたとしても、それはむしろ中村本の結末のめでたい一家円満を描く為のものであり、それが直ちに男児としなければならなかつた理由としては結び付かないのではないだろうか。更にそれが、大君に対する「罪」の軽減の爲になされたと考えるのは、穿さくが過ぎはしないだろうか。又その目的の爲に第一に血縁を変え（これについては〔二〕に於て後述する）第二の女一宮事件を省略したとして居られるが、女一宮事件の省略に、やはり前述したように、中村本に於ける根本的な最も重大な改作点で

あつて、ハピーエンド化と短篇化の目的とから成されたと見るべきものであらう。

(註1) 「寢覚」題参考—関根慶子氏—お茶の水女子大学「国文」第八号

(註2) 寢覚「小姫君」考—長谷川和子氏—「学習院大学国語国文学会誌」第一号 「夜半の寢覚」系図論—北川大成氏—「平安文学研究」第十八輯

(註3) (註2)及び「寢覚」人物小考—前田和子氏—「国文」第八号

(註4) 右前田氏論文—原作に於ても、老閨白は主人公の叔父であつたと見なす事については、私も同じ立場を持つ者であつてこの血縁関係を認めることによつて原作の諸事情に矛盾を生じないばかりか、一層明確にそれらの事情を理解する事が出来る以上、これを積極的に認めてよいものと思ふのである。例えばこゝの場合「故閨白の大殿の親の御心ざしにも劣らず限りなくあはれに物せられし心を思ひ給へ知る名残」なる言葉も、叔父甥の關係にあつてこそ、主人公が女一宮方に対していう弁解としての意味が真に理解されるのである。

二 源氏太政大臣子女の系図の変更について

この物語の冒頭に於ける源氏太政大臣の子女の系図の変更は、それが物語の発端であり中心人物に関する事柄であるだけに、原作と改作本とを読み比べる者にとっては、意表を突く改作点であると同時に、以後全篇の内容に重大な影響を及ぼすものとして注目されるのである。即ち、原作に於て、太政大臣の二人の北方のうち、按察

大納言女腹に男君二人(左衛門督、宰相中将) 帥宮女腹に女君二人(大君、中君—女主人公)としてゐるのに対して、中村本では、前者に左衛門督大君の二人、後者に宰相中将と中君の二人とする改変である。

松尾聡氏は早くこの点に注目されて、兄弟を敵味方として「血縁的にはつきり分けてしまつた事は」、当然兄弟間の感情や行動に大きな変化が行われている筈であり、この改変は「作中人物の心的葛藤の息苦しさを減じて物語を単純化し、快楽を求める低俗な流者に媚びようとする意識から行われたもの」としてこの改変の意義を重要視して居られる。しかし後述するように、実際に中村本の記述に當つて検討してみると、松尾氏が指摘して居られるような、同腹の兄弟が異腹となり、異腹のそれが同腹となつた為に当然生ずべき兄弟間の感情や行動の変化は行われて居らず、その為の特に原作に改変の手を加えたと考えられるものは全く見出せないようである。先頃発表された前田氏の御見解も、右と同様の根拠に立つて、「その方が自然であり、解り易いという作者の一つの解釈によつて単純に為されたことではなからうか。」といつて居られるのであるが、又、(一)大君遺子の改変理由のところ引用した如く、この兄弟關係の変更を主人公たちの「大君に対する『罪』を軽減しようとして」なされたものだと見解を提出して居られる。これは、この問題に対する中村本作者の改作態度或は改作意識という観点からすれば、どうしても相撞着する二つの御見解と解釈されるのである。

それでは、この問題に対する改作者の意図はどこにあつたと考えるべきなのであらうか。既に右の御考察もあることなので、要点的に私見を述べようと思ふ。

兄弟の系図が書きかえられたことよって最も大きな変化が予想されるのは、大君と中君との関係である。原作に於ては、松尾氏がいわれるように、「大君、中君は同腹の姉妹であればこそ中君は大君に対してひたすらすまないと思ひ悩み、大君はまた中君を信愛を裏切るものとして疎み苦しむのである」と考えられる。これを異腹との姉妹とした中村本は原作の深刻な悩みを緩和しようとしたのであるうか。しかしこの姉妹に関する両本の叙述を対比してみると大君と中君間の感情や態度には、特に相違は見られず、中村本は原作の叙述を殆んどそのままに辿っていることがわかる。(校註本四三〇四頁中村本上五六頁、以下頁数は上例に準ずる。七二頁上七七二七三頁、九九頁上二〇〇頁、一〇七頁上二〇七頁、一〇八頁上二〇八頁、一〇九頁上二〇九頁、一一〇頁、一三五頁上二二九一三〇頁等)又直接対比不可能な欠巻部分の叙述に関しても、同様に両者のお互に対する態度や感情に相違があったとは考えられないのである。(拾遺百番歌合三番及び風葉和歌集春下八七上二一三三頁 無名草子岩波文庫本六九頁下六七頁 下五九一六〇頁大君 遺児の後見を中君に依頼して死ぬ件前論参考照等)中村本のこの個所の叙述に、上記資料に見える「咲きにはふ」の歌がないことから鈴木弘道氏は中村本は単なる省略にあらざる改変を行っているのではないかと疑って居られるが、これはやはり、夙に鈴木一雄氏の御指摘にもあるように、中村本の省略とみるべきであろう。つまり、原作では巻二の終り近くなつてから、中君がかつて大君と仲睦じかつた昔の事をなつかしむ述懐の場面が、巻末迄に三度繰り返して描かれ(一二七・一三五・一四五頁)欠巻部分に入つてからすぐ初めの部分にあつたと推定されるこの

場面をも入れると、続けて四度非常に近似した心理描写の場面が出ていたことになる。そのうち中村本は恐らく梗概化の立場から二場面(一二七・一四五頁)は大きく省略し去つて、その中間にある広沢に身を隠した中君が雪の降る日姉上とかつて雪山を造らせて遊んだ頃の事をなつかしく思い出すという場面(一三五頁)だけは殆んど原作のまゝに写している。歌は改作されて「きえかえりうき事ありしやどなれど雪見るまゝにこひしかりけり(上一三〇頁)となつてゐるが、従つて中村本は同じように姉上と仲睦じかつた昔を述懐して歌をよむ場面が問を置かずに重出する事となつたのである。その為に中村本作者はこの場面の歌を省略して梗概化の方法をとつたものと考えられるのである。そしてその場合、姉大君に対する中君の感情に特に改変を加えたという形跡は見出せないのである。

そして更に、それらのうち、次の様な場合には、原作と事情を異にする中村本は、それが意図的になされた改変であるならば、当然何らかの手が加えられているべきではないかと考えられるのである。

(a) 大君が、夫大納言と中君との関係を聞き知つた時の心中である。

原作

我よりは万にいとめでたくすぐれたる君なれば、げによろしくは思ひ給はじを、いかにこよなく思ひ較ぶらんと思すに、よその人よりはいと怨めしく云々

中村本

われよりは万にいとめでたくすぐれ給へれば、げによろしくおぼえ給はじ、いかにおぼしつらんと、よその人よりはうらめしくと、云々

(一〇七頁)

(上一〇七頁)

右の中村本の叙述が殆んどそのままに原作の言葉を引写している事は明瞭であらうが、その場合、傍線を施した語句については、中村本は血縁關係が變つていたのであるから、こういう場合こそ幾分違つた表現がなされてもよいのではなからうか。例えば「母上異るといへど幼くより陸み聞えしはらからなりと思せば」等という言葉が付加されてもよいのではなからうか。特に改作本は、簡略化の傾向を辿る為、屢々説明的衍語が付加されているのであるから。(これと殆んど同じ語句が後の◎にも見られる。)

又中間欠巻部分の叙述に次の様なものがある。この場合は無名草子(六六・六九・七一頁)の記事と中村本の叙述との間に根本的な相違は見出せないものである。

(b) 主人公は、老閨白へ嫁す日の近ずいた広沢の中君の許へ忍び込み、自分に靡くようにと色々になだめすかず、その言葉、

「(入道どのは)たゆまじきよのしるしをきゝ給なば、たとひあね君のうちにさる事ありとて、さるべきちぎりとこそおもひゆるし給はめ。ましてそれよりさきとしり給なば、なにのつみかおはせん。御はらからはすでにそむき給にしかば、とてもかくてもおなじ事なり。云々」。(上一七〇～一七二頁)

右の言葉には、主人公が中君を口説く口実として、原作と同じく中君との契の方が大君との結婚よりも先であるという事だけしかいていない。しかし中村本の異腹の姉妹という關係に立つならば、追いつめられた主人公の氣持としては、傍線の施した語句の辺りは例えば、「母異なる女はかゝることよにあるまじきことかは」位はいつてもよさそうに思えるのである。この傍線の語句などは特に原作の言葉を、そのままに踏襲したのではないかと思われる叙述であ

る。この外に、主人公が妹中宮に中君との關係を打ち明ける記事(五四頁―上六八頁)などにも、同様の事がいえるであらう。

更に次の記事を比較してみよう。

(c) 大君忍びあえず、主人公と中君との仲を左衛門督に打ち明ける言葉

「我が身のはかばかしからぬ面起しにも、いかでおもだたく見なし奉らばやとなん、上のおはせずなりにし代りにとのみ、はかばかしからずとも互にこそは頼みをかけて、後見思ひ聞めと思ひ渡るに、そむきそむきにさし隔て、他人よりは人聞き恥かしがるべき事をなむ聞き侍る。云々」。(一〇九頁)

「わが身のはかばかしからぬをもて、こうへおはせずなりてのちは、たのみをかけて侍るに、こと人よりも人ぎきはづかしき事なん侍る。云々」。(上一〇九頁)

右の故母上についての記述であるが、原作の場合は、大君中君共に母は帥宮の姫君であるから、これでよく解るのであるが、中村本の場合、二人の母君は違ふ筈である。従つてそのままではどちらの母君なのか曖昧である。中村本としては、実情が明瞭に違つているのであるから、何らかの叙述の改変がなければならぬところである。最少限度「諸共にこの上のおはせずなりてのちは」位は書かねばならないであらう。前にも述べたように、そうでなくては、叙述の簡略化と共にそれに伴う説明不足を補ひ、且つ一層通俗読者層に解りやすくする為、説明的語句を挿入する傾向のある中村本であつてみれば、当然何らかの筆が補われなければならないであらう。

このように見て来ると、中村本は、姉妹の關係に、ある変化を意圖して、冒頭の系図を改めたという事は勿論考へられないばかりかその系図の改変によつて、以後の内容に質的な改変がもたらされる必要を認めていなかったのではないかと考えられるのである。それならば、中村本作者は、作品の内容は原作のまゝに置いておいて、しかもこの系図だけを書き変える必要を感じたのであろうか。つまり、原作に於いて異腹の兄妹同志が、それぞれ左衛門督は大君に、宰相中将は中君に特別の好意をもつて対立する關係に置かれるという事情は、見方によれば特殊であり、不自然に思えるであらう。そこで中村本作者は、好意をもつて助け合う兄妹同志を血縁的に眞の兄妹とすることによつて自然な形に直したのもあろうか。しかし宰相中将と中君、左門督と大君との關係を示す記述に次のようなものがある。

(d) 出産近くなつた中君を石山に隠そうと取計らう叙述
宰相中将・僧都・對の君など

して云々。

(七四頁)

さいしやうの中將はもとより
心よせなるうへ、おとゞも申あ
つらへ給たれば、そうづ、たひ
のきみもろとも云々。

(上七五頁)

(e) 前記(c)の大君の言葉の続きである。

昔より取り分きたる御心ばえ
の哀に思ひ知られ侍れば、かく
も聞え侍るなり。

とりわきたる御心の人より
あはれに思ひしられ侍れば、か
くもきこえ侍るなり。

(d) の傍線の語は、原作にないものを中村本作者が付加したものである。しかし中村本としては、同腹の宰相中将が親身に世話をやく

のはむしろ当然と考へられ、特別な説明語は不用であらう。更に、「もとより心よせなるうへ」という語は、原作にこそ適當する言葉であつて、挿入するとすれば、例えば「まことのほらかなるうへ」等といつて、宰相中将が同腹である事を暗示した上で、中将が特にこの問題にかゝり合う事の必然性を強調するべきであらう。従つてこの語は、むしろ改作者が不用意に原作の立場に立つて、説明を入れてしまつたと見るべきであらう。又(e)の取り分きたる御心」も左衛門督が同腹の兄である中村本にとってはおかしき言葉であつてこれも原作の叙述を不用意に写し取つたとしか考へられないのである。因みに、宰相中将、左衛門督に関する中村本の記述は、原作のそれと特に相違したものは見出せないが、たゞ左衛門督の記事には原作にあるものが多く省略されている。(八九、九〇、一四四―一四五頁等)しかしそれらは殆んどが梗概化の立場から省かれたとみられるもので、特にこの兄弟の血縁關係に原因があると考へる必要はないようである。

以上見て来た処を要約すれば、中村本作者は、兄弟の系図を改変することによつて、作品の内容に質的な変化をもたらすべく意圖したものではなく、又原作のまゝの兄弟の關係に一つの解釈を施したものと考へられない。従つて中村本作者には、冒頭の系図の改変が、内容的に如何なる意義を持つものかと考へざるを得ないであらう。とすると、この改変の根拠は作品の外に求めるべきであり、この場合冒頭に於てある思い着きによつて系図を改めたとか考へられないのではなからうか。そしてその思い着きというのは、おそらくごく常識的、通俗的な観点から、「一方の北方に男君二人、もう一方の北方に女君二人があつた」と云うよりも、「どちらの北方に

も男君と女君が一人ずつあった」とする事の方が、つまり子女の男女の性別を平均化する事の方が、より自然であり、中世の物語読者層に、より近親感を以て受入れられると考えたのではないであろうか。そして以後の物語改作に際してはこの改変の為に内容を改める必要等全く意識しないままに原作を踏襲して行ったのではないであろうか。

しかしその場合、左に示す例の様に、この改作の為に原作の叙述のままでは不都合があると感じて省略したのではないかと思われる例も全くない訳ではない。

(f)山の僧都の述懐である。

故上のあはれに己が寄辺無かりしを、かくまで育み立て給ひたる御心を思侍れば此の御前達の御事は朝夕の念誦のついでには先づ祈り念じ奉るに、一所は先づ生先あり、華やかなる様に定まり給ひぬるを嬉しき事と喜び侍るに、(三〇)〜(三一頁)

右傍線部分は、下段の中村本には省略されている言葉である。従って、無意識の如くに原作の叙述を辿るうちに、たまたまそのまゝでは不都合だと気付いた場合には、適当に省略などして改作の筆を進めて行ったものを考えられるのである。

(註5)「平安時代物語の研究」一七二頁

(註6)「中村本夜寝覚物語の検討」「国語国文」第二十四卷第八

号

はゝのあはれにかなしく侍しをかく育み給ふべき事おもへば、念誦のついでには、先づ祈り申すかひに、おさなくよりためしなくをひたち給へば、よろこび侍るに、(上三八頁)

(註7)「神宮文庫本『よはのねざめ』について」「国語」第三卷 第一号

以上人物に関する二つの問題について、中村本の改作態度を考察してみた訳であるが、これを要約すると、前者、大君遣子についての改変は、前記(1)(2)の改作と共に、究極に於て、中村本の根本的な改変態度である女一宮の主人公への御降嫁を取り去って、物語をハッピーエンドとしようとした事に根ざすものという事が出来る。後者源氏太政大臣子女の系図の変更に、これに対して、深い構想上の意図があつてなされたものではなく、物語の片隅に於てなされた、さかしらの通俗化の改変態度という事が出来よう。このように、中村本の改作は、構想の中心としては、原作物語を短篇化し、ハッピーエンド化する為に、女一宮の御降嫁を取り去った事は、実に巧妙な又周到な方法であるが、一方、細部については、この太政大臣子女の系図の変更の場合の如き、或は自己の叙述に前後矛盾を平気で行っている場合の如き、思慮の浅さ、独創性の乏しさを如実に示しているものといえよう。

最後に、こゝに論じた二つの問題に関連して、主人公女主人公の第三子第四子についての考察も行い度く思ったが、(当然考えねばならない問題でもあるので)この度は紙幅の都合で割愛し、又の機会にゆずりたいと思う。

—兵庫県立御影高等学校教諭—